

# はるるの あらし

著 / 姫野由香



同じ大学の音無さんと付き合いはじめて、三ヶ月。

彼はわたしを、森の中の別荘に招待してくれた。週末、ふたりきりでゆっくり過ごしたいから、と言って。

わたしは喜んで承諾した。

音無家はどうやらお金持ちみたいね。避暑地で有名な場所に別荘を持ってるなんて。

約束の日。彼の赤い車で目的地へ向かう。

別荘は新緑が映える素敵な場所にあった。観光地だけれどシーズンオフなので人は少なく、わたしたちは一日中くっついて過ごした。

夜半には、春の嵐が訪れた。

「おおおと風がうなっている。雨粒が屋根に当たると音も激しさを増してきた。朝はあんなに晴れていたのに。」

テレビの写りが悪くて、すぐに消した。ずっとお互いを見ていたから、あまり必要でもなかったし。

「るい……」

音無くんは甘い声で、わたしの名を囁いた。

腕が伸びてきて、後ろからわたしを抱きしめる。長い髪を撫でながら、首筋にくちづけた。

「ん、っ」

彼の舌先が敏感な耳をくすぐる。熱い息が音無くんの興奮を伝えてきた。

「あ……待って」

ふんわりと気持ちよくなっていたのだけれど、彼の身体を押しとどめた。ちょっと気になることがある。

「誰か、見ている気がする……」

この別荘に着いてからずっと、視線を

感じるのだ。

「へ？ 見てたらずごいなあ」

音無くんが喉の奥で笑った。

「こんな嵐の中、ご苦労さまだね」

「窓、見てくる」

「おいおい」

わたしは窓辺に近寄ると、おそろおそろ外を見た。

雨粒がガラスを叩いている。外の様子は、暗くてよく判らない。

が、さっき感じた気配は、もうないよ。うな気がした。

鍵が閉まっているのを確かめてベッドに戻る。

「……なんだか、不気味」

背中から抱き締めてくる熱にほっとした。大きな手に自分の手を絡める。

「心当たりとか、あるの」

「ない。けど、ストーカーとか、だったら……」

「気にするなよ。俺がいるから、大丈夫」

「えっちなこと、してるときって……無防備だから、狙われやすいんだよ」

映画なんかでよくあるじゃない。能天気なカップルってサイコホラーの餌食だと思う。

「じゃあ、るいが上になれ。俺は出入り口に注意を払っておくから」

「もお……」

柔らかいくちびると熱い舌を絡めあう。キスって気持ちいい。この年齢になるまで知らなかったのが惜しいくらい。お互いの唾液を飲み込んで、密着しながら相手の感じる部分を探る。

音無くんの指がいやらしい動きで、わたしの濡れた狭間を刺激する。いちばん敏感な部分をこねくり回されて、気が遠くなった。

彼はベッドに横たわり、来い、とわたしを誘った。

ランプシェイドの薄い明かりは消され、部屋は暗闇に包まれている。

喉の乾きを感じて、水を飲もうと起き上がるうとした。が、なぜか身体が動かない。

わたしは全裸のまま、手足を縛られていたのだ。

縄のようなものでベッドに固定されているのか、大の字にさせられ、身動きも取れない状態だった。

「音無くん……!？」

暗闇の中で彼の名を叫ぶ。

まさか、本当に、誰かが入ってきたの？

そいつがこんなことを……？

そう思った途端に、なにかがわたしの身体に触れた。

「や……っ、誰!？」

濡った手が、わたしの肌を撫で上げる。

鳥肌がたった。

たっぷりと蜜をたたえたままの下半部に、無骨な指が侵入してくる。

とろとろに溶けた部分にペニスをあてがい、ゆっくりと腰を落とす。

「あ、あ……あんっ……」

自分のいやらしい穴に、肉棒が飲み込まれてゆくのが見える。たまらずに目を閉じるけれど、身体の中心に侵入してくる熱い肉の存在は消えない。

荒くなる息を隠せない。

奥まで、達した。ゆっくり、ゆっくり

と、腰を上下に動かす。

と、ふいに音無くんの腰が動いた。

「あー、っ……!」

彼の逞しいペニスがわたしの内部を掻き回す。蹂躪される感覚にわたしは溺れた。

音無くんは両腕を伸ばし、わたしの胸を乱暴に揉んだ。屹立した乳首をぎゅう、と掴まれる。痛みさえ快感に変わる。

「いいっ……いいの……」

膣がひくついて、彼をくわえ込んで、離さない。

「るいは可愛い顔して、すごい淫乱だよね」

「やだっ……」

そんなことない。音無くんが、はじめて、だったんだから……。まだ経験は浅いんだから……。

でも、とろけそうになるほど、すごく気持ちがいいの……。

「あ、あっ、いっちゃうっ……!」

絶頂を感じてわたしは声をあげた。は

したない言葉を口に出すことも、興奮を煽る。

音無くんがわたしの腰を両手で押さえ、結合をより深くした。強く強く打ち付ける。

「やあんっ……!」

頭の中、激しい火花が散る。わたしは深い暗闇の中に落ちていった。

しばらくして、わたしは目を覚ました。

しょ？」

「おずおずとわたしは答える。なんだか、様子がおかしい。」

「地下室があるんだよね。見たい？」

「別に……」

彼はわたしの返事など意にも介さない様子で、ランブシェイドの明かりを点けた。

薄く照らされた部屋の中、キャスター

付きの棚を動かすと、床に扉が現れた。

大人ひとりが入れるくらいの幅だ。

扉を開け、二重になっているらしい蓋を外すのを、わたしは不穏な面持ちで眺めていた。

異臭が鼻をついた。ここからでは、地下室の様子までは見えない。ただ、まともな匂いでないことだけは確かだった。

「なに、これ……」

「死体の臭い」

歌うように、楽しげに、音無くんは呟

いた。

死体……の、腐臭？

たまらない濃度だ。わたしは顔をそむけた。

音無くんがゆらゆらと近付いてくる。

わたしは裏切られた気持ちでいっぱいだった。

「ひどい、音無くん。いいひとだと、思ってたのに」

「いいひとだよ……」

彼の瞳は、狂っているとは思えないくらいに澄んでいた。

手に持っているのは……まさか、刃物、だろうか？

「だって、るいが綺麗なうちに殺してあげるんだから！」

音無くんがナイフを振り上げた。

「綺麗なうち、ね……」

わたしの口調は冷めきっていた。

切っ先がわたしの喉を狙い迫ってくる、その瞬間。

ガラスの割れる鋭い音とともに、黒い

塊が部屋の中に飛び込んできた。激しい雨が同時に吹き込む。

「ぐあッ!？」

音無くんのナイフは部屋の隅に突き飛ばされた。

「るい。大丈夫か」

「大丈夫に決まってるでしょ、グレイ」  
全身ずぶ濡れの黒い狼が、低く唸る。

わたしは呆れたためいきをついた。

「やっぱり見てたの、あなただったのね」

視線の主はこの狼だった。せっかく長い休暇を与えたのに、わたしから離れないなんて一途な下僕だこと。

「な……なんなんだよ!」

尻餅をついた音無くんは、会話するわたしたちを震える手で指差した。狡そうな視線で、飛ばされたナイフを探しはじめる。

グレイがわたしに訊いた。



「るい。こいつ、やっちゃっていいの  
か？」

すこし迷ってから、わたしは頷いて  
みせた。このひとつで相当面白いから、  
ちよっぴり残念だけど。

あ、やっぱり惜しいかな、なんて思っ  
ている隙に、グレイは素早く音無くんの  
自由を奪ってしまった。

脚の腱を両方とも噛みきったのだ。

雷にも負けないような絶叫が部屋中に  
響き、音無くんは床に転がった。不様な  
格好。

不様な格好といえば、わたしだって相  
当なものだ。未だ全裸だし。割れた窓  
から雨風は吹き込むし、寒くなってき  
ちゃった。

集中して念じると、縄は柔らかなチー  
ズのようになって容易に切れ、わたしは  
自由の身となった。

「るっ……るいっ……」

苦痛に顔を歪め、音無くんはわたしを

見上げた。脂汗と涙と鼻水で顔面はひど  
いありさま。いい男が台無し。

「地下室の死体って、何人分？」

「五……いや、七人、くらい？」

「全員女の子？」

こく、と頷く。

「変態」

つまさきで頭を小突いてやった。連れ

込んで殺していたというわけか。

音無くんは転がったまま頭を垂れる。

「許し……て、くれ。るいを殺そうとす  
るなんて、俺が馬鹿だった」

「ほんとよ。相手を間違えたわね……」

ひとのこと、言えないけど。こんな変  
態に巡りあってしまった自分の不運を呪  
いたい。

「あーあ。もうすこし、普通の女の子の  
生活を楽しみたかったのに。えっちも  
はじめて覚えたのに」

グレイがげんなりした表情を見せたの  
で、銀色の髭を引っ張ってやった。下僕

血の気の引いた顔。ひどく怯えた目。小刻みに震える身体。

「あなたが殺した女の子たちも、あなたの前で、こんな表情を見せたのでしょね」

音無くんが目が見開かれた。

黒い狼が、哀れな獲物に飛びかかった。

飽きるほど聞き慣れた絶望の呻き。

音無くんはとても美味しかった。

次の日からまた、グレイとの退屈な旅が始まった。

はるのあらし  
大学にも正式に籍は置いていないし、わたしの行方を気にするような親しいひとでもないから、姿を消すのは気楽なものだった。

ただ、当分えっちはお預け。つまんないの！

♪ fin ♪

